特275
802

一位伯爵津輕承昭題字

×
複写

東宮殿下青森縣御巡啓記

257
776

始

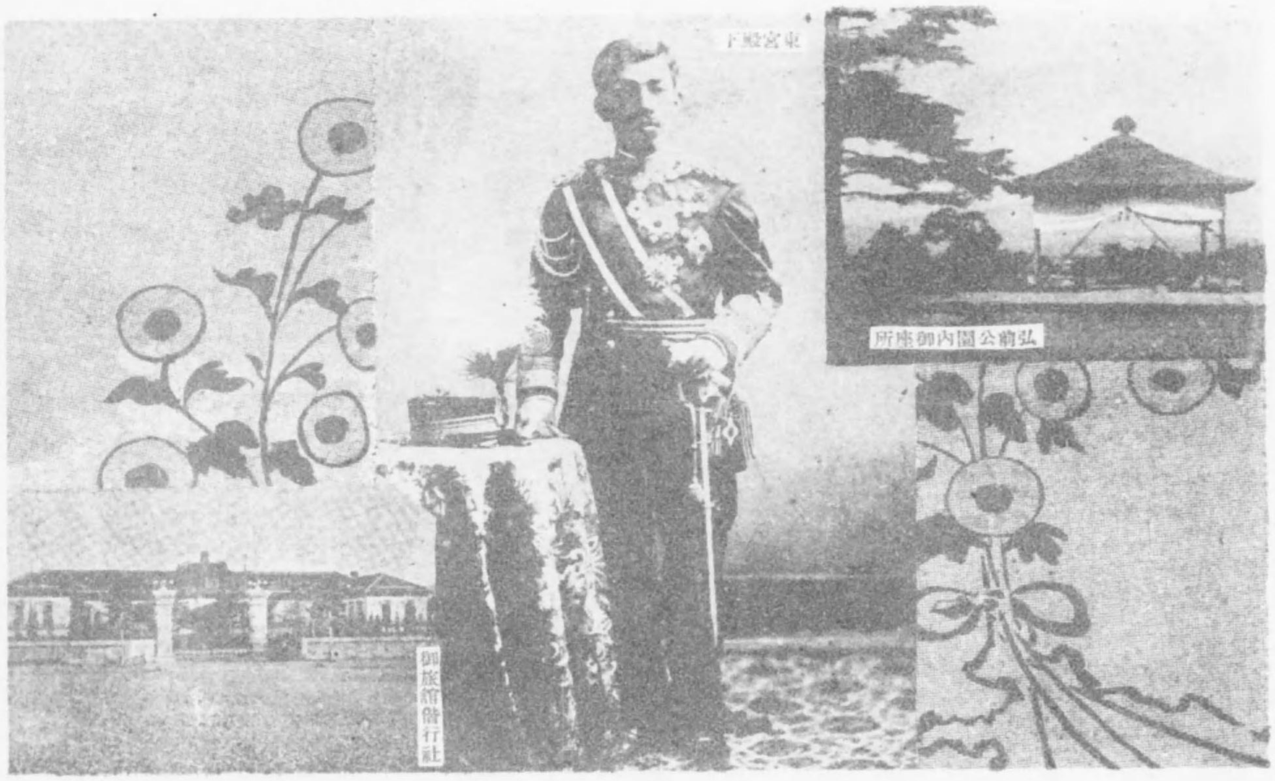
樂器

漢西域

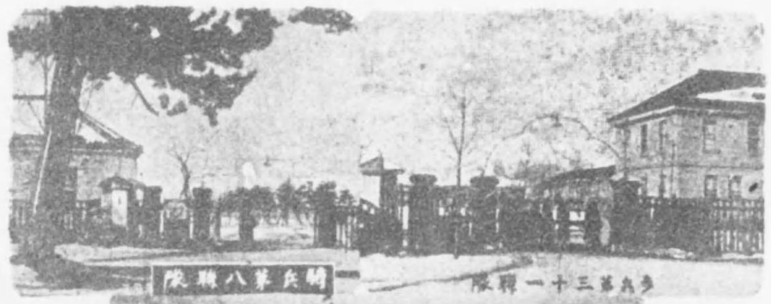
樂器

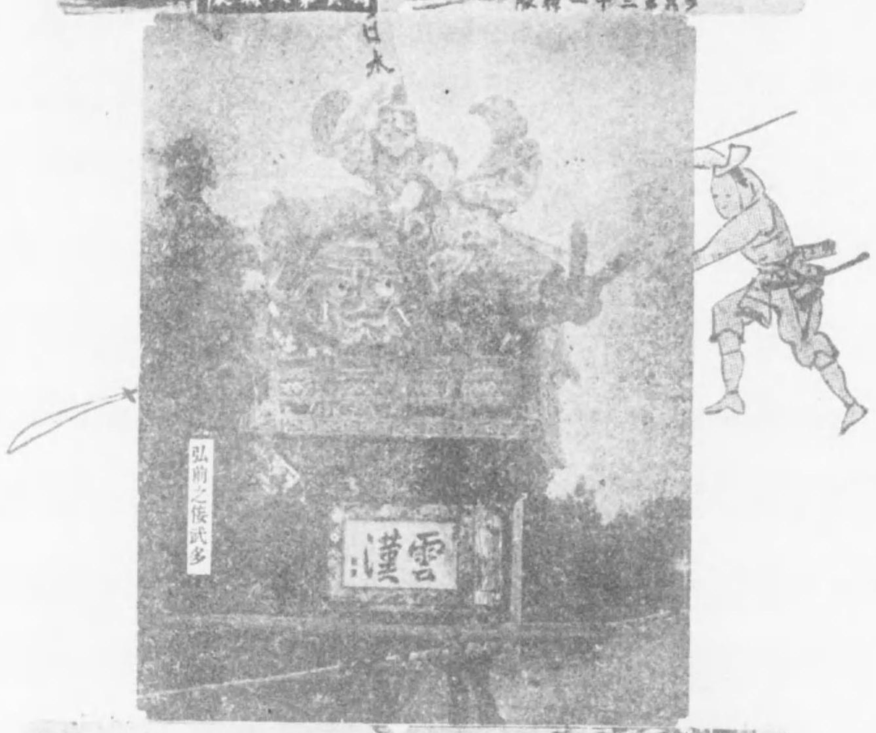
恩光輝

戊申秋　承昭


東宮殿下
弘前公園内御座所
御旅館飾行社

北京大學
國公祠弘
弘毅第一志願學校
第一中學校
已令部


騎兵第八聯隊
第九第三十一聯隊


日本
弘前之後武多
雲漢

野戰砲兵第八聯隊
輜重兵第八大隊

弘前之宿武多

御巡啓記

(一)東宮殿下の御略歴

東宮殿下は　今上皇帝第三の皇子にして。明治八年八月三十一日御生誕遊ばされ。御名は嘉仁御命名式明宮と稱せらる。二十年八月三十日儲君御治定。二十二年十一月三日立て皇太子となり。初めて陸軍歩兵少尉の職を賜び賜ふ。現時累進して陸海軍少將となり大勳位を授けらる。御歳三十歳なり。

(二)東宮殿下の御盛德

(一)御記憶力

皇太子殿下の御盛德として特に記し奉るべきは殿下が人に優れて御記憶の確かにあらせらるゝ事なり嘗て侍講某氏。殿下が御講義中動もすれば左を向き右を顧みらるゝなど一向に書物の上に御心を注めさせ給はざるやうなれば深く之を憂ひ斯くては御學問の進みの程も心掛なりとて或時俄に講義を止め恐る〳〵申上ぐるやう『臣不肖の身を以て殿下に講進し奉るおとを得たるの光榮は子孫に傳へて誇とすべく祖先に對しても臣が孝道は之によりて盡されたりと信ず。然るに臣の學淺く殿下を敎へまつるに足らざる爲めか殿下臣が講進に倦まれ動もすれば御學問中御心を他に寄せ給ふやうの御氣色を拜しまつる之れ偏に臣の不肖の致す處と雖も殿下の學の進せ給はざるおとあらば臣何を以てか　聖上の大御心に添奉るべき殿下願くは今少く臣が講義に御耳を傾け給はんおとを』と言上し奉りしに殿下は微笑しつゝ某氏に向ひ『予が講義に注意せぬとて左ばかり汝の心を苦しめしおとは氣の毒

明治 41 11 25 内交

なりけり。然れど予は汝の講義は悉く聞き居りて一字一句と雖も空には聞ざりし筈なり。試に汝が今述べたりし一章を予より申して見んか』と仰せありて侍講か今講進せし一章を繰返し講義あらせられしに一字一句違ふ處なく侍講の講進し奉りし通なれば某も御記臆の强健なるを歎じ『斯く迄に臣の講義を御聞ありしを知らず御諫め申せしかと返々も口惜しく無禮申したる罪死に値すべし』と打伏したるに殿下は笑ませ給ひつゝ『早く其次を講義せずや』と促し給へば侍講も其心の寛大なるに感佩して更に御講義をぞ續けられたり

(二) 御仁心

申すも畏けれど或夏の御事なりとか殿下には例によらせ暑を日光の御用邸に避け給ひ山に潮に心を慰め御散策もめづらしからざりしに或る時侍臣等が聲を潜めての物語に誰やらん死したる由を早くも聞し召され御慈愛に富ませ給ふ御身の如何で其儘に聞き流し給ふべき直に侍臣を近く召れ『何人か死したるか遺族は如何になしつる』との御尋ねに侍臣はいとゞ恐縮し奉つり『申上ぐべき程の人にあらず賤しきものゝ事なれば』と答へたてまつりしも殿下は『人の死ぬるかとに賤しきも貴きもあらざるべし。況して賤しければ其後かり哀なるものを』との御言葉に侍臣も今は隱さんよしもなく『其者は此御用邸の近くに住みたる車夫にして屢殿下の御伴を仰せつけられたものなるが先頃より病氣に罹り此程死りし由申し來り候より哀と存じ只今其噂を申したるなり』と申上げしに殿下には眉を顰め『彼の車夫が死りしとか。平素は最も壯健に見えたりしに哀なる事したり』と仰せありたれば侍臣等は今更尊き御身を以て尙ほ賤しき車夫の死をさへ悼み給ふ難有さに何れも涙に咽びて差控えしに。殿下は更に『車夫とあらば定し貯蓄もあらざるべく家の柱を失ひし遺族等の歎きさぞうなるべし』と桂主事を近く召させ『車夫か死りし由を今聞きたるが。聞かぬ中は兎もあれ聞きたる上は捨て置く事は叶ふまじ。況して遺族等も貧しと云へば遠かに金を與へよ』と御諚ありたれば主事は直に承はり『幾何ばかり下賜仕るべき。百圓も下賜致すべきにや』と問ひ奉つりしに殿下は頭を振り給ひ『百圓許ありたりとて何かなるべき其十倍も下賜し遣はせ』とありたるに桂主事は殿下が金錢などの卑じきものを少しも御心に掛させ給ぬを畏みつゝ『殿下よ。車夫の身にても斯く難有き御下賜あらんには。臣の如きも死り候はんときは何物を御下賜下さるべきや』と問ひ奉れば殿下は打笑せて『桂が死りし時は金を遣すまじ日頃愛で使ふ文鎮を取すべし』と仰せられたりとか

(三) 下情に通じ給ふ

殿下が卑賤の者を惠せ給ふ時は何時も金を遣はし給ふが御例にて之は全く下情に通じさせ給ふによるとぞ承る

沼津に避寒あらせられたる折の御事なりとか。一日侍臣と共に狩野川の上流に御散歩あらせられしに其上流の村の童等が脛もあらはに笑さゞめきつゝ澤地にて芹を摘むを御覽せられ稍暫時足を止て童等の態を打眺めさせ給ひしが最も興ある事に思されつゝ供奉のものを呼ばれ『彼の童等より芹を貰ひ來よ』と仰られたれば侍臣は直に童等の許に至り殿下よりの御言葉なれは其摘みたる芹を取せよと語れば童等は何れも身に餘る光榮に其摘みたる中より良きものゝみを選み二三束を摘へて侍臣に献上せり侍臣は斯くと返言申せしに殿下は最不興の面地にて『献上とは云へ童等の事なり價なく取んは道理に背く。價を取せよ』とありたれば侍臣は殿下の細心に渡らせ給ふを畏み直に童等の許に歸りて壹圓札を與へしに童等は幾度か殿下の方を打拜み難有き御心を謝し奉りしに殿下は聽て立還りて侍臣に向ひ『何程の價を取せたりや』と御下問ありたれば侍臣は恐る〳〵『壹圓を下賜して候と』答へまつりしに『此寒き折に水の中に入り指も足も凍えつべきを壹圓とは甚ざ少しとありたれば侍臣は恐縮して再び童等の許に引返し更に壹圓を加て取らし斯く言上申せしに殿下は頭を振らせ『うれにても尙少し今少し取らせよ』と遂に芹數把に拾圓の御下賜ありたりしかう賤しき民草の金錢を貴ぶを深く知ろしめさせらるゝにあらざれば此事あらざるべかりしならん

(四) 御健脚

殿下は頗る御健脚にわたらせ給へば御暇あるおとに山野を跋渉し御狩獵を好ませらるゝを以て傳へまつるべき話柄も多かる内。今より七年ばかり前の御事なりとか。殿下には愛鷹山に狩りし給ひけるが兼て御健脚を承知し居れるより侍臣等は何れも殿下を見失ひ奉つらざるやうにと御附添ひ申上げたりしも殿下は御足にまかせ草根を分け岩を攀ぢ給ひて平地を歩かせ給ふに異ならねば終に見失ひまつりしに。殿下には只一人進み給ひ何時しかに勢子供の集れる處に出させ給ひけり。勢子等は只御供の人にやるべしと軽く敬ひしに殿下にはつか〳〵と勢子等の傍に寄らせ焚火より火を取らせ烟草を吸ひ給ひ狩獵に就てくさ〳〵の御談話あり或は兎を打つおと犬を驅るおとなどおまやかに打笑ひつゝ物語らせ給ふに勢子等は俄に深山にて友を得たる心地しつ打興じて殿下とは夢にも知らざるを殿下は笑ひながら『皇太子殿下には御獵が御好きの由なるが御上手にや』と問はせ給ひしに勢子の一人承はり『殿下の御獵はさるおとながら御足の達者なるには御近侍の人々も困じ居る由に承る』と述たるに殿下は可笑く思召し給へど今更に其尊き身なるおとを明し給ふ機もなければ更に他の話に紛らはし給ふ折柄御近侍の人々漸く此處に在しませるおとを見出し孰れも恐縮して控へたれば勢子は打驚き俄に色を失ひて御前にひれふし『尊き殿下とも存じ奉らず御威嚴を侵しまつりし罪深し』と御詫申上げしに殿下には近侍の者を顧み『殿下は獵は上手にはあらねど足は達者なさうな』と仰せられしまゝ打笑ひて少も御心に懸けさせ給はざりけるとぞ

(五) 殺生を好ず

殿下御獵の際は常に土谷宇兵衛と申すものをして勢子を指揮し狩出さするを常としつるに或日の事なりけん。鹿は更なり兎一匹だに獲物なかりしより宇兵衛は斯ては殿下の御興も薄かるべければと勢子を驅りて諸所を追立たれば百獸皆潜みて姿を現はさぬに宇兵衛は遂に困じはて恐れ多けれど兼て飼ひ置ける兎を放ちて一時を凌んと人を走らせて己が家より一匹の兎を取寄せ殿下の御出をはかりて叢より追ひ出したりしが殿下は終日の無獵に兎の飛出るを見給ふやさておりと御肩なる銃を取らせ狙をすましてゝ御放ち給はんとせしが俄に銃を下し給ひ最も不興の御面地にて近侍のものを召せ『予は跛足の兎を打つまじ』と仰あり更に聲を勵まして『今叢より飛出でたる兎は跛足なる上に山地に慣れざる模樣の見ゆるはまさしく飼兎なるべし。顧ふに本日の獵に一の獲物もなきより予の不興にあるべしと思ひて飼兎を放ちたるものなるべきか甚だ心得ぬ業なり。早く取調て委細を返言せよ』とありたれば侍臣等何れも恐懼して御傍を離れ宇兵衛を招きしか〳〵の旨を申し傳しに宇兵衛は今更に殿下の御聰明に打驚き眞は飼兎を取寄せ候なりと恐縮して申上げゝれば侍臣等も殿下の御眼力のさときを畏みて斯く申上げしに殿下は以後慎みますやうとの仰せありて深くも咎め給はざりし由いと有難きおとにあらずや

(六) 自轉車の御稽古

殿下の何事にも堅忍にましまして其蘊奥を究めざれば止まざる御根氣の強きには侍臣等も皆恐縮し奉るよしなるが殿下は自轉車の輕快にして運動に此上もなきものなる由を聞召され直に一臺の自轉車を御買上げになり大竹某と呼べるものに就き敎を受けさせられしが殿下は先づ大竹に問はせらるゝやう『如何にせば自轉車に上達すべきや』とありしに此大竹は頗る洒落のものなりしが御問に應じ『然ればにて候水を泳ぐものゝ申候には水泳は二三度溺れて水を飲まざれば能く泳ぐやうになり得ずとか。自轉車も亦左樣にて三四度車より落ての後ならざれば上は達困難しく候』と言上し奉りしに殿下には此言葉を深く奥あるおとに思召し直に御稽古相成りしが頗る御熱心にて自ら把手を取らせ幾度か落ちては又乘らせ落ちては又乘らせ給ふ程に御着衣は汗に濡れ砂塵に塗みれたれば侍臣等は孰れも憂慮し萬一の事もありてはと御止め申せしに殿下は打笑ひ給ひ『心配するには及まじ大竹が申すには幾度か落ちて見ねば上手にならぬとか落ちたりとても此低き車の上より何程の事かあるべき早き道を行きて

上達の遲からんよりは嶮しきを登りて絶頂に達せんかと男子の本望にあらずや』とのみの給ひて再び車に召させ給ふにぞ侍臣も強て御止め申すかとも叶はざりしに果して御稽古一日にして自由に自轉車に乘らせ給ふかゝりしと其後殿下は頗る御上達遊ばされたれば侍臣等と郊外に車を驅り給ふ折にも上に立せ殊に御健脚の中々に早ければ何時も只一人侍臣等を駈け拔かせ遲れたるかとを笑はせ給へり曾て葉山の御用邸に御在しゝ頃なり殿下には平素の如く近〻の某を召させ逗子迄自轉車の遠乘を試むべしと誘ひ某を伴はせて逗子へ駈けさせられしが左なきだに御達者の殿下とて忽ちにして砥の如き道路を疾風の早さにて驅り給ふ程に某は力及ばず遙の後に遲れしが殿下には愈々興に乘じ行手の丘の走るが如きに吾を忘れて召させられるに如何にしけん道路の側の凹地に落ちさせ給ひしかば車諸共に畑の中に轉び給ひぬ折柄此畑に五十五六と覺しき農夫の畑を耕やしけるが斯くと見て飛ぶが如くに駈寄り殿下を起し車を引上げしが唯逗子あたりの別莊に遊びに來れる若紳士の遊乘りとのみ思ひたればかくまでもかんな狹い處を自轉車で駈けるなどは無法至極だよ。近頃自轉車が流行するものだから吾も彼もと碌々乘もせぬ癖に乘り廻して此揚句が此の狀だ。氣の毒は氣の毒だが乘る方でもチト矯まつさい』と叱るに殿下は可笑さに頭を垂れて衣の土を掃ひ居たりしが侍醫は殿下の畑の中に轉び給ひしを見奉り心も狂乱するばかりに打騷ぎ息せき切つて駈寄りしに殿下は今しも老いたる農夫に扶けられ道の上に立せ給ひしばかりにして老農は殿下の御前とも知らず叱り居るより遙に平伏し御恙なきを祝しまつりしに農夫は始めて尊き御身と知りしかば俄かに色を失ひ土の中に跪づきて罪を謝しまつりしに殿下の御寛仁なる少しも心に掛けさせ給ふ色もなく侍臣を顧りみさせ『轉んで飛んだ目に逢ひましたが幸に此爺が扶けて呉れて』と其無禮なる言葉をも咎させられず却て侍臣より御返をさへ申させられしかば農夫はいとゞ恐縮して感涙にくれけるとぞ

(七) 規律ある御起居

皇太子殿下の御高德として特に感佩し奉つるは其御起居の謹嚴にしてまことに規律あることなり。漏れ承はる處によれば殿下毎日の御規定として朝は午前六時に御目覺させられ御口嗽ぎの後朗かなる日は御庭に下り立せ露の芝生を踏ませられ澄みたる氣を呼吸せられ或は体操を遊され又雨などの降りて御庭に下り立せ給ふことかなはざれば室内にて御体操相成り其上にて御衣を脱がせ御召換の上にて御日拜所にならせられ皇祖皇宗並に両陛下を遙拜あらせられ之を終りて七時と云ふに御朝餐を召させらる

御朝餐の後は各種の新聞紙を食卓に廣けさせられ御閲覽相成り午前九時と云ふに御定めの如く御學問所に入らせられ三嶋、本居、三田の三侍講杉御用掛等交々出仕申上げ和漢洋の學課詩歌書道語學等の御研究あり又御都合によりては福嶋陸軍中將、坂本海軍中將、松川陸軍少將の三御用掛を召させ陸海軍の軍事に關する御研究を怠らせ給はず九時より十二時迄の間少しも御休憩なく御用掛を次々に召て御研究あらせらる而して正午に御食堂にならせられ御晝餐をしたゝめ御食後は妃殿下と御對話あり又は常侍のものを召させ御談語あり食後二時間を過させ御運動あり御運動として自轉車御乘馬などを好ませられ特に御乘馬は御嗜好の一つなれば殆ど隔日に御修業あり廣き御所内を此處彼處と乘り廻はし炎暑の日にも寒き空にも休ませ給ふことなし此午後は御乘馬御散歩の時を除きては御書見或は書類を御覽ぜられ或は陸海軍諸學校及軍隊へ行啓あり親しく課業を御研究あり又御所に在しますなど皆此午後の御時に於てせらるゝ趣にて五時頃に至り時は御參の皇族方と御對面を又伺候の面々を御引見あるなど

御入浴六時晩餐の卓にならせらる而して御食後兩殿下御對話又は御書見ありて十時前後に御寢所に入らせ給ふを例とし殆ど此規に反き給ふことなし

(一) 弘前市の準備

(一) 陳情委員の出京

本年六月初旬頃　東宮殿下東北地方御行啓の事本市に傳はるや。市民は皆之を以て千載一遇の事なりとし。全力を擧けて奉送迎の準備に斡旋せしか。七月下旬に至り。殿下には弘前市の軍隊及び東奥義塾。第一中學校。第一高等女學校を御巡視あらせらるゝ外。一日の御滯泊たもなしとの風說傳り。然も此說は單に一片の風說に止まらずして。根據ある說なるおとを確めたれば。弘前市の當局者は大に驚き。當時東宮主事柱潛太郎氏。下見分として來縣の際なりければ。委員を派して同氏に陳情せしむる事に決し。市會よりは議長大高歳行氏外二名。商業會議所よりは副會頭野村忠兵衛外一名を代表者として。七月廿七日午后急行青森に至らしめ。親しく柱主事に面して陳情する處あり。同時に渡邊師團長も亦。其間に斡旋する處ありたれば。柱主事は充分事情を領して歸京せる如くなるも。市當事者は尙自ら安んぜざる處ありしと見へ。八月六日市長代理として參事員野村忠兵衛。市民代表者として市會議長大高歳行の二氏を東京に特派し。市長及び商業會議所の陳情書を。村木東宮武官長に提出して切に　東宮殿下の弘前市に御滯泊あらん事を哀願せしに。殿下も市民の衷情を哀れと思召してや。將た他の事情に由りしにや。終に弘前市には御二泊の事に御治定せられぬ。市民の喜びや知るべきのみ

(二) 準備委員の選定

之より先。弘前市にては　殿下の御滯泊と否とに拘はらず。出來るだけ奉迎の準備を尽さんと欲し。八月一日左の如き處務規程を設けたり

○處務規程

▲東宮殿下行啓に付奉迎送其他に關し事務處理の爲め委員を設くる事△委員は市參事會員市會議員市役所員新聞社員商業會議所員を以て組織し市長を委員長に助役を副委員長とす。新聞社よりは一名或は二名其他は全員を擧けて委員とすること。但し時宜に依り市内有志者よりも委員を選定することあるべし△委員中より若干名の專務委員を設くること但員數及選定方は委員長に一任すること△事務分掌の爲め左の掛を設く

△庶務及接待掛　一奉迎送に係る事項。一御旅館並御休憩所設備に係る事項。一御巡覽所設備に係る事項。一獻上及上覽品に係る事項。一供奉員以下宿泊所に係る事項。一計統表に係る事項一記錄に係る事項。一經費に係る事項。一御使者御派遣所設備に係る事項　△土木掛　一道路修理其他總て土木に係る事項　△調度掛　一御用品の調達其他總て物資供給に係る事項。一人力車人夫等の供給に係る事項。一御用物の運搬に係る事項。一一般出納に係る事項　△警衛掛　一御料水の調査選定に係る事項。一乳牛の調査選定に係る事項。一一般衛生に係る事項。一警備に係る事項　△裝飾掛　一御旅館及御巡覽所に係る事項。一市内裝飾に係る事項

超へて四日右の規程に基き左の諸氏を委員に囑托したり

▲庶務及接待掛　櫻庭又藏(市參事會員)小嶋音之進、野村音次郎、古川惟行、岩見篤三郎、鳴海傳次郎、川村武次郎(以上市會議員)宮川久一郎、古田昌三郎、宮腰太助、中畑貴、秋庭有穂、(以上商業會議所員)

▲土木掛　宮川富三郎、齋藤徹、村谷初右衛門、石郷岡文吉、大高歳行(以上市會議員)兩森音次郎、山内勘三郎、對馬定紀、福永忠助(以上商業會議所員)

▲調度掛　野村忠兵衛(市參事會員)山中卯太郎、宮川平吉、黒澤清藏、近藤東助、木村一太郎(以上市會議員)武田秀三郎、宮川忠作、今泉道次郎、久保初太郎(以上商業會議所員)

▲警衛掛　奈良知足(市參事會員)宮川富太郎、内山登瀾、高倉良藏、前田彌助、古田榮次郎(以上市會議員)櫻庭秀輔、小野恒三郎、三上直吉、佐藤才八(以上商業會議所員)

▲裝飾掛　菊池定次郎(市參事會員)東海健藏、知藤幸助、佐藤滅四郎、柱木卯大郎、千葉金作、田邊宮吉(以上市會議員)中村三次郎、竹内清吉、永井準助、一戸寅之助(以上商業會議所員)

右諸氏の外市役所の吏員全部を專務委員として。各掛の下に係屬せしめ。小山内市長を委員長に。佐田煤田の兩助役を副委員長として。之を統括せしめ。着々準備に着手せる際。同月十五日に至り。在京の田中本縣事務官より。　殿下は弘前市に御二泊遊ばさるとの電報ありたれば。市當事者及び市民は驚喜踊躍し。一層勇を鼓して奉迎の準備に幹旋したり。今其設備の大要を左に掲ぐべし

(三) 公園の設備

公園の設備は。先つ本丸より記せんに。同處は其凸凹高低を平均して縱横に道路を作り。芝生を一面に張り付け。樹木には總て外柵を設け。正面岩木山に面したる處。則二本の椴松の北方に四阿屋を作り。之れを殿下の御休憩所となし。眼下に見ゆる大堀を浚渫して。溢るゝ許りに水を湛へたれば。此邊は總て見違へる許りの景色となりぬ。次に舊御玄關脇の石垣崩壞して見苦しければとして。之れに松樹を假植して假山の形となし。白鶴數十を作りて其上に置き翔ける者喙む者天を仰て傲嘯する者地に俯して悲鳴する者優悠自適する者等。千態万狀見る者をして眞に實物を見るの想あらしむ。其他杉の大橋を架け換へ。下乘橋を修繕し。追手門、東門、二の丸入口門を塗り換へ。本丸に長竿を立て。綱を四方に張りて數百の球燈を点じたる等。殘る隈なく粧飾を施したり

(四) 市内の粧飾

弘前市にては一面に於て斯の如く。市としての準備を完成すると同時に。他面に於ては。町内若しくは個人としても。出來るだけの準備をなし。以て此の千載一遇の盛事を奉祝せんと企圖し。市會議員及び市吏員若しくは商業會議所議員を奉迎委員としたる外。別に町内に準備委員なる者を置き。其町内に於ける裝飾及び奉迎事務に當

らしめたり。是に於てか此等の委員は時々會合して。各其町内に於ける粧飾に盡力したり。今其一班を擧くれば左の如し

一、土手町、一番町、元寺町、親方町、本町五丁目等　殿下御通行の町内は全部紅白の幔幕を小店前に張り詰むる事

一、　殿下御通行の塲處にあらずと雖も市内樞要の町内は前項の例に依る事

一、弘前市各町は一間毎に日の丸を記したる提灯を軒頭に掲くる事

一、日の丸の小旗を一間毎に一本の割合を以て軒先きに掲くる事

其他弘前市にては一番町、本町五丁目、元寺町、代官町、新寺町三十一聯隊入口の五ヶ所に獄迎門を設置し、夜間は之にイルミネーションを點じ。百石町にては鞍馬山天狗の俊武多を造りて。之を停車塲通りの明地に飾り付け。角み、角は両呉服店は個人として。店頭に目凄しき飾り付をなし等。弘前市の粧飾は眞に空前の盛況を極めたり

又北辰堂、明治館、暘明館、城陽會にては殿下夜間の御慰みに供せんが爲め。當市有名の俊武多を作る事に決し。夜を日に繼ひて之れか製作に從事したり

(五) 御旅館の設備

弘前市に於ける　東宮殿下の御旅館は他に適當の塲處なきに由り。昨年度に於て新築せる陸軍偕行社を以て之に充つる事に決定し。一切の粧飾設備を師團に託し。市は之か爲めに四千圓の經費を支出したり

仝社の建物は其附屬建築物を除きて正面裏口二十七間奥行七間あり今回殿下の御座所と定められたる處は仝建物の西端南面せる三間に四間の一室にして仝室の北方に接續せる三間に四間の一室は御食堂となす又北面せる四間

に五間の一室は謁見所なるが以上御三室とも華美壯麗なるカーテン及絨氈其他を用ひて裝飾を施されたり又前記謁見所と相對して東方にある一室即ち正門玄關の左方にある四間に五間の一室は縣高等官の詰所にして二十間に五間の中央大廣間は其西方上段四間に六間を日壇にてしきり其の北面せる一室を御寢所に南面せる方を供進所となす此處より東方の一室は侍從武官及東宮太夫の居室次は主事及侍醫の二室次は事務室次は等外官室にして東端の一室即ち舊僧行社の賣店なる四間に五間の一室は之を判官室に充てたり而して侍從武官長東宮太夫と主事と侍醫と事務室と等外官との各居室は之を金屏風にて區劃したるが屏風の双數總て十八双なりと尙調理所は東端南面の三間に四間の室を以て之に充て御湯殿は御座所御食堂と御調理所との中間の位置に新築せられ御厠は御寢所の西方端に新築せられたり

內外出入を嚴にせんが爲め正門の左右に一名宛の門衛兵士を見張らしめ又門內左方には十餘間のバラツクを張りて消防夫を收容し以て非常を警戒せしめたり

東宮殿下の市內御巡啓

弘前市當事者及び一般市民から寢食を忘れ至誠を傾盡して準備に力を盡し。一日千秋と指折り數へて。待つに待たる　殿下行啓の當日則ち九月二十三日は來りぬ。當日の模樣の如何なる者なりし乎は。讀者乞ふ左の記事を讀みて之を知れ

（一）御着前の光景

○高天地淸　東奥の天地秋尙未だ深からずと雖も颯々として天空を翔ける風には秋の香を薰じ濃厚なる靑葉僅かに赤紅の色を呈して四山亦秋色の影を湛えたり

此時此際　我英明なる東宮殿下には畏くも其鶴駕を東奥の天地に巡らせ給ひ正に本日を以て弘前市に入らせ給ふ市民の光榮何ものか之に加へん

されば市民の上下は鶴駕を奉迎し併せて此千歲一遇の光榮を紀念せんが爲め誠意赤心以て其御道筋を飾り嚴かに四邊を警戒せりいでや左に御着弘當日の午前に於ける市中の光景を報せんに

○時ならぬ爛熳の花　道を御旅館なる偕行社前にとりて北進住吉町に出づれば御道筋は塵一点の影を止めず翻々として軒頭に飜へる日章旗点々赤球の如き球燈燦として眩ゆき紅白の幔幕は家々として掲げざるなく戶々として張らざるはなし更に土手町を橫ぎり代官町を過ぎて停車場通りに出づれば道路坦々として砥の如く停車場前より代官町角に至るの道には砂を撒き水を運び丁只管に淸潔に努め適宜の場所には既に夫々れ警官を配置して取締を爲し更に轉じて代官町角より土手町を下れば先づ代官町と住吉町に至る十字街頭には漫陀羅鳥居形の裝飾門に十六箇の電燈あり夫れより西すれば只幔幕日章旗球燈燦爛として通路を飾り行くものをして恰かも花林を過ぐるの感あらしむ殊に中土手町より坂本町に至る入口には見事なる盆栽を飾り付け亦其附近には第二部消防の消火器を整列して非常の警めとなす蓬萊橋を渡り下土手町に至れば之實に弘前に於ける銀座通りなり纒々たる樓閣は天を摩して高く就中三大呉服店の隨一たる角み角はの二大呉服店に於ては洋風の模擬的家屋を建築し華美なる裝飾を施して光輝燦然たり下土手町を經て一番町を上り右折して元寺町に出づ路傍悉く日の丸高張提灯を樹て街頭を飾り以て町內を裝飾す道路亦坦々たり

(二) 御來着の光景

御豫定の如く廿三日正午小坂より當市に御着あらせられたり御着車前までは空模樣怪しく雨さへ降り來たりたれば奉迎者は何れも千載の一遇を雨と過さんかとを憂慮したるところ殿下の御着と共に雨全く止みて雲を拂ひたる空の美しくなりたるあり難けれ△さて殿下の御着車あらせらるゝや三發の煙火半空に響く間もなく鳥越驛長は恭しく進みて扉を排して階段を掛けたるが御車中に於て津輕伯爵及ひ渡邊師團長に拜謁を被仰付夫れより鐵道廳より派遣されたる平井鐵道廳總裁代理增田技監御先導を申上げたるが**プラットホーム**に御出迎の有爵者勅任官貴衆兩院議員高等官市長縣會議長等に擧手の禮を賜はりたり△停車場道南側は將校軍隊判任官公吏市町村會議員赤十字社員愛國婦人會廢兵有勳者軍人遺族學校生徒等代官町の十字街に至るも寸隙を餘ささゝるの奉迎者なりしが殿下には御紋章ある腕車に召させられ武田知事御先導申上く　殿下には恐れ多くも一々擧手の禮を賜はりつゝ豫定の御順路通りて御旅館なる偕行社に入らせられたるか△武田知事小原事務官には大館まで御出迎へ申上け下岡秋田縣知事は奉送し來たれり△各村落より出てたる人は幾萬といふを知らす停車場より御旅館までの間は人を以て作られたる長城の如くなり從つて其の雜踏も非常なるものなりしが殿下の御着と共に靜肅を守りて混乱怪我等は無かりし

(三) 中學校臺臨

午后二時御出門第一中學校御臺臨職員生徒一同奉迎和久校長の御先導にて階上の便殿に入らせられ御休憩武田知事學校の狀況一般を言上し奉り校長及名和、江田の二教諭に拜謁を賜ひ　御眞影を下賜せらる夫れより校長の御案內にて各學科を御上覽あり不意に寄宿舍へも臺臨あらせられたり御上覽中擊劍柔道は最も御注意遊ばされたる模樣なりし成績品は重に生徒の作文を繰返し〳〵御覽あらせられ種々難有御言葉を賜はりたり終りて一同の奉送のうちに御歸還あらせられたるが此の時雨頻りに臻り御召車はしとゝに濡れつゝ進ませらる

御便殿は校舍二階の西方北端の四間に五間の一室にして其處には花莫座を敷き詰め裝飾用の**カーテン**其他を以て飾り付けられ供奉高等官扣室は御便殿の南隣に設けられ其他供奉員縣官新聞記者の各室等夫れ〳〵設けられありたり

(四) 高等女學校臺臨

東宮殿下には御豫定の如く第一中學校より第一高等女學校に成らせらる職員其他一同の奉迎あり永井校長御先導を申上け先つ便殿に入らせられ武田知事より學校の狀況を言上し夫れより修身裁縫其他の實地教授御覽あらせられ次に成績品陳列室にて特に圖書園藝品に御注意御覽あらせられ最後に体操唱歌室に臺臨公園に向はせられたる後便殿に御休憩中校長敬頭に拜謁を賜ひ御眞影を下賜せられ御歸還あらせらる

(五) 公園に御成り

第一高等女學校より弘前公園へ御成り此の時天霽れ本丸の四阿屋に於て御休憩あらばさる弘前市各小學校生徒は西廊を南より北に向ひ唱歌の聲勇ましく旗行列をなし御覽に供し奉りしに公園の展望の佳絕なるを御覽はして今まで經過し來れる內にも展望最も優れたりとの御稱美あらせらる夫れより松森町の獅子踊りを御慰みに供し奉りしに絕へず御下問あり次て親しく小松を御手植えあらせられし後ち東奥義塾に御臺臨あらせらる此の時岩木山の

半ば雲に蔽はれ半は霽れたる遠景は頗ぶる御目に止られ**シガー**を喫させつゝ御展望にふけられ給ふ奉迎熾んなり

(六) 東奥義塾臺臨

最後に東奥義塾に御成り職員生徒一同の奉迎を受けさせられ杉山義塾長の御先導にて便殿に御休憩の上武田知事より學校の狀況一班を言上したる後杉山塾長及ひ澤田教諭に拜謁を賜ひ御寫眞を下賜せらる夫より第五學年の英語(教諭小野裏)第四學年の化學(教諭加藤光三)第三學年の地理(教諭針替透)に就て順次授業を御覽あらせられ次に体操場に成らせ撃劍、柔道を御覽あらせられしが此の時生徒の勇壯活潑なる動作に御滿足の御樣子に拜し奉りしが知事を經て塾長に本校の撃劍及び柔道は何流かとの御下問あり最後に成績品陳列室に於て本校出身戰死軍人の寫眞を御覽あらせられ旅順では海陸とも多くの死傷があつたと御私語あらせられたりしが尙ほ体操場に於て校旗に御目止められ何の旗かと御下問あり校旗と御答申上げたるに立派な旗であるとの御言葉ありしといふ

(七) 御歸館

義塾臺臨後御歸館あらせられしが此の時また雨降る時々降雨ありしも市中は非常の盛觀を極はむ

(八) 御陪食、佞武多御臺覽

御歸館後、津輕伯爵、渡邊師團長、武田知事、下岡秋田縣知事、嶋村旅團長に御陪食を賜ひ。尙佞武多を御臺臨ありたり。當日の佞武多の種類左の如し

一、日本武尊熊襲を誅し(以上明治館) 一、日本一の桃太郎。一、平維盛山姥を斬る。一、扇燈籠(以上北辰堂)
一、素盞尊大蛇を斬る(以上陽明館) 一、村上義光護良親王の落行くを見る(以上和穩町) 一、中大兄皇子入鹿を誅し(以上城陽會)

以上の佞武多は 東宮殿下の臺覽に供する者 るを以て。各館とも丹精を込めて製作に從事したれば。孰れも見事に出來上りたるのみならず。其中には高さ三十五尺に達したる者もありて。 殿下には善き御慰みなりしか。生憎降雨なりし爲め。稍原形を損せしも。 殿下には熱心に御臺覽あらせられ。寫眞を取れとの御下命ありしと云ふ

(九) 献上品

此日 東宮殿下に献上したる各團体の諸品は左の如し

文臺、一個。津輕塗机、一個。卓、一個。津輕塗廣蓋二枚重、一組。仝印籠口隅切文庫、一個。仝附屬合形硯箱、一個。仝琴短册箱、一個。吉兆面取印籠口色紙箱、一個。弘前市長小山内鐵彌。弘前市實業統計、一冊。紫蕨織、一匹。弘前商業會議所。林檎酒、二打。松森町六十一番戸松木合資會社長松木彦右衛門。木通蔓製椅子、一組。代官町弘盛合資會社傳習場青川喜太郎。奉迎詩歌帖、一函。大日本歌道奬勵會陸奥支部長 大道寺繁禎。鷹城吟社長松野因策。鷄卵、五十顆。青森縣家禽協會長小山内鐵彌。木通蔓製小兒椅子、三脚。弘盛會社員會社傳習工場宮腰太助。仝上。津輕塗花臺、一個。元寺町漆器會社長山田浩藏

(五) 殿下の軍隊御巡啓

(1) 師團司令部 皇太子殿下には御豫定の如く昨日午前八時三十分御旅館御出門。仝四十分第八師團司令部に御着

輿遊ばさるや門内には渡邊師團長以下師團司令部。旅團司令部。憲兵隊。弘前聯隊區司令部。衛戍監獄職員全部弘前衛戍病院。歩兵第三十一聯隊。建築支部出張所。兵器支廠。弘前聯隊區豫後備將校團同相當官等整列して奉迎申上げ殿下は直ちに階上の御便殿に入らせられ渡邊師團長は御下問に對し團下の狀況を奉答し次に將校及び同相當官に拜謁を賜ひ渡邊師團長。嶋村旅團長。丹羽歩兵第三十一聯隊長に御寫眞。銀杯。服地等を下賜せられ師團の創立及戰歷書を御下問に相成り渡邊師團長より一々奉答し暫時御休憩の後野砲兵第八聯隊に向はせらる

(2) **野砲兵第八聯隊** 仝九時八分師團司令部より野砲兵第八聯隊に御着。將校以下門内に整列して奉迎し劉曉たる君が代の吹奏をなして敬禮を行ひ本庄聯隊長の御先導を以て將校集會所貴賓室に仮設したる御便殿に御案内申上げ隊況を言上し書類の御巡覽終るや聯隊長以下四名の佐官に各個。大尉以下三十名の將校仝相當官に拜謁を賜ひ夫より殿下の御寫眞及び聯隊長に服地。將校集所會に銀杯等を下賜せられ別室に陳列したる奉天附近の會戰中敵彈を受けたる第一大隊長黑河内少佐が觀測の際使用せし防楯。黑溝台の會戰中老橋の砲兵陣地に於て敵砲彈命中したる山砲彈藥箱。奉天附近の會戰中彈藥補充の途中砲彈命中したる山砲車輪。仝戰役中上等兵齋藤勇松戰死の際着裝せし見る用せし砲台鏡。仝會戰に於て敵彈命中して破損したる山砲車輪。仝戰役中上等兵齋藤勇松戰死の際着裝せし見るも慘憺たる戍衣及背嚢等御覽遊ばされ渡邊師團長より仝隊が會戰當時殆んど歩兵戰に等しき近距離に於て奮戰したる狀況を言上したる處殿下には深く御感に入らせられ夫より仝隊の御願ひに依り將校集會所の前面に二尺許の松を御手植に相成り第二大隊より第一大隊へ各中隊の歩哨を御巡覽遊ばされ仝九時四十分頃騎兵隊に向はせらる

(3) **騎兵第八聯隊** 仝九時三十分野砲兵第八聯隊より騎兵第八聯隊に御着。將校以下は野砲隊と同じく營門内に整列して奉迎皖々たる君が代の吹奏中に將校集會所内の假便殿に御着席あらせられ高橋聯隊長より隊況を言上し高橋聯隊長及び隊附少佐は各個に大尉以下仝相當官二十一名の將校に拜謁を賜ひ御寫眞及び聯隊長に服地。將校集會所に銀杯等を下賜せられ仝御便殿に奉掲し居れる御寫眞を御持返りに相成り日露戰役に於て敵彈を被りたる三十年式騎兵銃。電信碍子。殿下御愛馬の小型並に高橋聯隊長の秘藏せる月山貞一作三口。開兼房作一口陸奥守忠吉作一口都合五口の古刀等を御覽あらせられ營庭の東方に片寄りたる丸庭に御成り四尺許りの松を御手植遊ばされたる後ち高橋聯隊長の意匠に依り特に新調したる御凭掛りに桐に鳳凰を彫刻せし紀念の御椅子に御凭りなされ第一中隊の梯級障碍物。第二中隊の巾飛障碍物(二回)。伏臥馬等を御上覽あらせられしが殿下には始終御熱心に御目を注かれ濠洲產馬の早足。**パツサーツ**及び御望みに依り御覽に入れたる第二中隊の駈足輕乘等に就て馬の名稱及び其旗手等を御下問あらせられたる處高橋聯隊長は濠洲產馬の名稱は田主にして騎手は山形出身の軍曹堀岩五郎。駈足乘輕の馬名は春塞。二駒の二頭にして騎手は一等卒岡部太郎、齋藤因次郎、柳谷慶次郎、二等卒遠藤正三の四名なる旨一々御答へ申し上げ其他時々御下問あらせられ最後に第二中隊の厩舍を御覽ありて輜重兵第八大隊に向はせられたるが殿下は平生文物に御心を留めさせらるゝのみならず軍事にも亦御熱心なるは是れを以て御察し申しも猶餘りありと云ふべし尚ほ仝隊にては殿下隨從の新聞記者一行に對し將校集會所に於て特に酒宴を開かれ高橋聯隊長は東宮殿下の行啓に際し諸氏の御來訪を辱ふしたるを以て粗宴を開く旨を述べ吉岡帝國通信社員は新聞記者を代表して高橋聯隊長の健康を祝し葡萄の美酒を饗せられたるは一同の深く感謝する所なり

(4) **輜重兵第八大隊** 午前十時三十分頃騎兵第八聯隊より輜重兵第八大隊に御巡啓あらせられたるが松原街道及び新道の兩側には中北西各郡より御英姿を拜觀せんとて態々來弘せし各小學校及び其他の老幼男女蝟集して幾重の人垣を築き奉迎頗る盛んなりし斯くて殿下は仝十一時頃御着あらせらるゝや松枝隊長以下將校兵士一同は營庭に整列して奉迎をなし直ちに隊長の御先導にて將校集會所に仮設したる御座所に入御。暫時御休憩の後ち松枝隊長以下將校仝相當官に拜謁を賜はり御寫眞、銀杯及び聯隊長に御寫眞銀杯服地を下賜せられ仝隊の御願に依り仝集

會所前に丈け二尺許りの松を御手植へに相成り更に兵舎の階上を御覽あらせられ次に營庭に於て將校の軍刀術を御覽に供したる處殿下より其氏名を御下問あらせられたるに大隊長は中尉阿武良矢。仝八代亮輔の二名なる趣を申上げ續いて下士以下の仝術を都合五回御覽に入れ夫れより聯隊長は隊内の狀況を言上し被服倉庫の狀態及び馬場の高地等を御下問あらせられたるに一々隊長より奉答し仝十一時三十分頃御旅館に還御あらせられたり

(5) 野外演習の台覽　十一時半頃輜重隊より御歸館あらせられたる東宮殿下には御晝餐後午后一時三十分御旅館御出門。練兵場なる馬場の高地に御野立遊ばされて各隊の野外演習を御覽に相成り殊の外御滿足あらせられ仝四時半演習終了後直ちに還御あらせられたり其の想定は左の如し

◎想　定　（實　員）

一、羽州街道を弘前平地に向ひ北進する敵に對し黑石大鰐街道を南進する第八師團は湯口南方谿谷内より敵の一縱隊（兵力約歩兵二大隊を基幹とせる混成部隊）北進ゝるを知り羽州街道を南進せしめたる右側支隊をして之に對せしむ其任務は敵を隘路内に擊攘して師團の作戰を容易ならしむるにあり

二、支隊は弘前西南方に於て敵と遭遇を豫期し縱隊を分進しつゝ前進し目下に於ける諸隊の位置は別紙略圖の如く此の時迄に支隊長の知り得たる情況左の如し

一、歩兵の支隊を有する敵の騎兵約一中隊は大開原を弘前方向に前進す又大開原西南端に敵縱隊の先頭らしきものを見る

二、第八師團主力の先頭は柏木町附近に達し其前面の敵は碇ヶ關附近に達すへき豫定なり

三、支隊の編組左の如し

歩兵第三十一聯隊（二中隊欠）　野砲兵第八聯隊第二大隊（六門の三中隊）　支隊長陸軍歩兵大佐　丹羽剛

演習に關する注意

一、敵の歩兵は人員幕的及赤旗一本を以て一中隊を標示し騎兵、砲兵は實員とす

二、敵の人員は帽に白帶を附す

三、演習の開始は『氣を附け』『前へ』の號音及輜重兵營内に高く揭揚する日章旗の記号によりなすへし

演習統監陸軍少將　嶋村干雄

◎右側支隊命令　九月二十四日午后一時　於新寺町

一、歩兵の支援を有する敵の騎兵約一中隊は大開原を弘前方向に前進す又大開原西南端に敵の縱隊の前頭らしきものを見る

我騎兵聯隊は馬場高地附近に在て大開原方向の敵情を搜索中なり

二、支隊は攻擊の目的を以て馬場高地より練兵場東側林檎園に亘り展開せんとす

三、歩兵第三大隊（前衛）は馬場高地を占領すべし

四、歩兵第一大隊（第四中隊欠）（本隊前頭）大隊は輜重兵營南側を經て馬場高地東麓にて練兵場東側林檎園に亘り展開すべし

五、野砲兵第二大隊に舘野高地に前進し大開原及練兵場方向を射擊し得る如く陣地を占領すべし

歩兵第四中隊（左側衛）は砲兵の掩護を任す

六、歩兵第二大隊（第五、第六中隊欠）本隊の右尾は輜重兵營西南端に至り豫備隊たるへし

七、大行李は茶畑町南端を先頭とし途上に停止すべし

八、余は歩兵第三大隊と共に前進す

◎右側命令　九月二十四日午后一時　於新寺町　支隊長陸軍歩兵大佐　丹羽剛

一、歩兵の支援を有する敵の騎兵約一中隊は大開原を弘前に前進し又大開原端西南の敵の縱隊の先導らしきものを見る

二、支隊は馬場高地より練兵場東側林檎園に亘り展開せんとす

三、騎兵聯隊大開原方向の敵情を搜索すべし

四、余は小澤街道を前進す

◎軍隊區分

獨立騎兵　隊長　陸軍騎兵大尉及川虎彦。騎兵第九聯隊第一中隊。歩兵第三十六聯隊第一中隊（支援隊）

前衛　司令官　陸軍歩兵少佐某。歩兵第一大隊（第一、四中隊欠）。騎兵第一分隊。野砲兵第九聯隊第一中隊
本隊（同行軍序列）　歩兵第四中隊。野砲兵第九聯隊第一大隊（第一中隊欠）。歩兵第二大隊
支隊本部　騎兵一分隊。

支隊命令　於大開原　九月二十四日午后一時

一、敵の縱隊は目下弘前市街内に達しあるものゝ如し又柏木町附近には敵縱隊の南進するを見る
　我師團の主力は目下碇ケ關附近に達する豫定なり
二、支隊は敵を攻擊する目的を以て大開原東端附近に展開せんとす
三、獨立騎兵は依然の任務を繼續すへし
四、前衛は大開原東端林檎園附近を占領し本隊の展開を掩護すへし
　但し歩兵第一、第四中隊を爾後貴官の指揮を屬す
五、野砲兵大隊は舘野高地及練兵場方向を射擊し得る如く大開原に陣地を占領すへし
六、歩兵第二大隊（第七、第八中隊欠）は前衛大隊の右翼に展開すへし
七、歩兵第七、第八中隊は第二大隊の右翼後に位置し豫備隊となるへし
八、大行李は大開原南方二千米突に停止しあるへし
九、余は砲兵陣地附近にあり

支隊長陸軍歩兵中佐　湯地藤吉郎

此の日風稍强かりしも快晴なりしが演習の目的は北上する敵に對し師團の右側支隊が大開野の附近に開戰擊退せんとするものにて二時頃彼我の騎兵斥候点々として現はれ間もなく野の東南方に支援隊を有する敵騎兵一中隊現はるゝや馬場溝の蔭に潛みありし支隊の獨立騎兵は喊を擧け迅風の如く襲擊して之れを退け夫より戰機漸く進み て野の西北方高地に陣せる敵砲隊と立野高地に陣せる支隊の敵砲隊共に殷々として射擊を開始し彼我の散兵戰亦次第に物蔭又は草叢より現ちはれ前進し二時半頃戰況最も壯烈を極はむ
三時敵は野の南方に據守して進まず專ら防禦に努むるに至るや支隊は一層猛烈なる攻擊を加へ間もなく突擊に移れり喊聲山野を震動せり
時に演習中止の號音傳はる　殿下には騎兵獨立戰ありし頃より始終御野立にて戰況を御覽せられ折り〳〵渡邊師團長に戰況を御下問あらせられ更らに將校を集め嶋村統監をして御前講話を爲さしめたり
因に師團右側支隊長は丹羽聯隊長假設支隊長は湯地中佐なり
本日午後晴天にして拜觀者野を蔽ひ演習爲めに一層の盛況を呈せり

▲外崎林檎の光榮

殿下には大開野の演習より御歸還の途次外崎嘉七氏の向陽園に御立寄り種々御下問あらせられ其の忝なさに園主感激せり

(六) 東宮殿下の御出發

皇太子殿下には御豫定の如く昨日午前六時五十五分偕行社なる御旅舘御出門。村木武官長桂主事以下の供奉員を隨へさせられ富田新道より住吉町を一直線に代官町に出て停車場に御着の上宮廷列車に御乘車青森へ御出發あらせられたり

之れより先き**フラットホーム**には津輕伯爵、渡邊師團長、高等官、奏任待遇者、衆議院議員、縣會議長、市長、非役從六位勳六等以上、縣會議員、構内の兩側には郡會議員、市會議員、官吏、市吏員、構外には將校婦人會員、愛國婦人會員赤十字特別社員、御道筋の右側には村長以下公吏、村會議員、神職僧侶及諸宗教師、有位有勳者、赤十字社員、軍人遺族、各學校、在弘部隊長將校以下々士卒等靜粛に整列して奉送したるに殿下一々御會釋を賜はり御機嫌麗はしく御發輿あらせられたり

(七) 東宮殿下の青森市御巡啓

▲御著青の光景

皇太子殿下には弘前御出發御豫定より二分遲れて二十五日午前八時二十二分青森停車場へ御安着あらせらるゝより先き御着車前十分計り鵜飼近つき奉れるを報する爲め煙火は打揚げられ次て日章旗を機關車に交叉したる宮廷列車の轟轟として進行し來れるを見るや轟然たる三發の煙火にて之を一般に周知せしめたるが朝來の曇天は此の時より更らに晴れ渡りて天光いと美はしく輝き初め殿下を奉迎するに似たりけりやがて宮廷列車の奥羽線構内に停車するや殿下は直に御紋章ある御召車内に於かせられて東面して御直立あらせられ車窓を撤去せられて**プラットホーム**内に於て最も御召車に近く奉迎申上げたる伊集院第一艦隊司令長官玉利要港部司令官等といと早くも御眼を合はされ何事か御頷ぎあらせられ玉ひしが知くに拜察せられぬ間もなく原田青森驛長は御召車前に進み出でゝ踏板を敷き扉を外づし動かぬやう之を支持して御外出をお待ち申上げたるに殿下にはいと御活潑に海軍少將の軍服を召させられたる御身を躍らして**プラットホーム**に出でさせ玉ひ鐵道廳總裁代理增田技監御先導申上げしが殿下には殊にツカ〳〵と伊集院司令長官の方へと御足を運ばれ玉ひしやう拜せられしに伊集院司令長官にも亦た殿下の御前指して進み出で擧手の禮を爲しつゝ數尺の間に迫るや殿下には颯爽たる御英姿を稍々前面に傾けさせ玉ふよと拜する間もあらせられずいと御懷かしげに此上なく御氣嫌麗はしく擧手の御會釋を賜はりぬ夫より玉利要港部司令官、南部子爵等に御會釋を賜はり尚ほ**プラットホーム**内に奉迎申上げたる文武官、議員、市長等に對し絶えず擧手の御會釋を賜はりつゝ御靴の音輕う階段を上り給ひき

▲プラットホーム内　にて奉迎したるは伊集院司令長官、山田少將、玉利司令官、南部子爵、外調所鐵道所長、小原事務官、矢嶋、中村兩技師、佐々木帝室林野整理局支廳長、黑木典獄、福岡裁判所長、今井檢事正、伊藤、江頭兩判事、野嶋聯隊長、植村中佐、前田衛戍病院長、加藤貴族院議員、市田、阿部、大坂三衆議院議員、芹川市長其他陸海軍副官等なりき

▲宮廷列車の順序　は八百〇三號の機關車に二三等車、一二等車、御召車、一二等車、二三等車の五臺なりき因に殿下御外出せらるゝや直に仝列車を東京線内に組替へたり

▲途中の光景　殿下には村木武官長以下多數の供奉員を隨へさせられ**オバープリッチ**を御降段あらせらるゝや此處に於ても各高等官從五位勳六等以上の非役軍人赤十字特別社員佩有功章、愛國婦人會員等の奉迎を受けさせられ御會釋を賜はりつゝ御徒歩にて停車場構内を御通りあらせられて驛の正門に出でさせられ御紋章ある御召人力車に召させられしが其御歩行の御迅速に渡させられて且つ御擧動の御活潑なる御平素の御勇健なる御体力の程も拜察せられいと畏こかりし殿下には夫より御列肅々として上新町中新町を經過あらせられ濱町通りを青森棧橋へ成らせられしが御召車の停車場前を御通過あらせられし際には奉迎の歩兵第五聯隊は劉喨たる喇叭を奏すると共に捧銃の最敬禮を爲したるに殿下には其他の諸團体及各學校生徒等に對し絶えず純白の手袋を御用ひなれる御手を擧げさせられつゝ御叮嚀に御會釋を賜はりたりしが御沿道は市中及附近村落の人々堵を爲し千歳の一遇に洩れじと十重二十重に人垣を造り其數幾萬といふを知らざりき

▲御乘艦　棧橋に御着なりしは午前八時三十分頃なりしが直ちに汽艇に御乘りあらせられ御召艦三笠に御座乘あらせらるゝや皇太子旗は檣頭高く揭げらる八時四十分驅逐艦皐月御先發となり隨之に次き八時五十分三笠動き初め春日、あけぼの、の順序にて警備し威風堂々大湊を指して向ひしが其の壯儀を拜せんとて沿岸は一圓に人を以て

築かれしを見たり

▲要港部行啓

東宮殿下には御豫定の如く二十五日午前八時半弘前より御着青直ちに御順路棧橋に成らせられ軍艦三笠に召されて大湊要港部に行啓遊はさる是先。第一艦隊よりは司令長官伊集院中將及原參謀は停車場まで春日艦長荒川大佐山下參謀長、牟田參謀は棧橋まで孰れも御出迎へ申上げたり聽て殿下には御機嫌麗はしく棧橋に御着多數の御付供奉員外渡邊第八師團長、武田知事等を隨へさせられて三笠の水雷艇に召され供奉員の過半は他の水雷艇に便乘棧橋前附の所より御召艦三笠に向はせらる此の時各艦奉迎の喇叭を吹奏し總員登舷禮を行ふ光景實に壯重を極めたり聽て殿下御召艦に御移乘了らせらるゝや諸艦は第一先導驅逐艦朧、第二御召艦三笠、御三供奉艦春日、第四全驅逐艦曙の序列にて大湊に向ひ航進を開始せらる時に空やゝ曇りたるも雨降らず秋風靜かに吹いて海波穩かに一隊十四節の速力にて三十哩の航程いと愉快なりき

正午豫定より遲るゝあと約三十分にして大湊入港中の富士、日進の兩艦の奉迎を受けさせられて要港部に御着直に三笠の水雷艇に召され供奉員一同を隨へさせられて第二棧橋より御上陸御座所に充てられたる要港部司令官室に入らせられ御少憩の後ち下士集會所を經て水交社貴賓室に入らせられ先づ玉利司令官より要港部情況を聞し召されたる後ち仝司令官秀嶋參謀長、山下副官、安東主計中監、羽太軍醫中監、岡田知港事、石井機關少佐を初め將校仝相當官二十名及佐藤憲兵隊長、在鄕將校六名に拜謁を賜ひ次に要港部寫眞帖、矢の根石、瑪瑙石(以上要港部の)津輕塗漆硯箱一對(武富前司令官の)等の献上品を受けさせられ又御隣室に陳列したる要港部全景圖、古書畫、灰鮑、昆布、海參等を御覽せられ夫より御晝餐を食し召されて後ち午後一時三十分御寫眞一葉を要港部に金百圓銀杯一個を水交社に御下賜の上御立ちあらせられて仝社玄關の手前約一間半の所に丈け五尺許りの小松を御手植るあらせられ夫より玉利司令官の御先導にて病院、棧橋、工場等御覽の上仝工場棧橋より青森御出發の時と同樣三笠の水雷艇に召されて途次浮船渠を御覽せられて二時四十分御歸艦青森に向け當港御出航あらせられたり要港部にては數日前より第二棧橋に大御紋章を組み出せる綠門を設け又た殿下御着の前より官公吏、郡町村議員、神官僧侶、學校職員生徒、高齢者、篤行者、軍人遺族、廢兵、赤十字社員、愛國婦人會員、武德會員、在鄕軍人等千數百名を特に要港部構内にて奉迎に使せしめたるか尙ほ一般奉迎者は要港部より大湊に至る海岸に並列して殿下御召の水雷艇御通過毎に萬歲を和唱し盛んに奉送申上げたり因に新聞記者一行は供奉艦春日に便乘を許され殿下の大湊行啓に隨鑾するの光榮を擔ひたりき

▲青森御歸着

昨日午前八時五十分青森御發大湊に行啓遊ばされたる東宮殿下には海路仝日午後五時當港御歸着直ちに御召艦三笠の水雷艇に召されて棧橋より御上陸官公吏、步兵第五聯隊、議員、赤十字社員、愛國婦人會員其他各團体及一般奉迎者の盛んなる奉迎を受けさせられ御順路御旅館に御還啓あらせらる

▲縣廳御成

皇太子殿下には御豫定の如く二十六日午前九時御旅館御出門前日の鹵簿にて本縣廳に入らせられたるが縣廳構内其他の奉迎者既報の順序を以て御出迎ひ申上げ殿下には直ちに階上御便殿に成らせられて御小憩あり此際武田知事は縣治の一班を言上し青森縣志外十數種の書冊を奉呈しそれより別項の如くうれ〳〵武田知事以下に拜謁を賜

り地方係室に陳列したる献上品を御巡覽の後還啓仰出されうれより第三中學校に成らせられたるが縣廳へは御寫眞を賜りたり

▲第三中學校御成

第三中學校にては栗原校長初め職員生徒の奉迎を受けさせられ次て校長の御先導にて便殿に御休息知事より學校の狀況に就て言上し栗原校長高須教諭に拜謁を賜り御寫眞の下賜ありてうれより順次學科、体操、成績品等を御巡覽あり尙ほ御豫定以外特に体操場に於て柔道の實況を御臺覽あらせられたるが柔道は第三、四、五學年生七名に石橋教諭加り投げの型乱取りの二種を御覽種々御下問の御容子あり學科にては英語科に最も御注目あらせられ成績品にては第四中の英習字南北南郡立農學校よりの馬鈴薯等は就中御注目種々御下問あり入學者教育程度表、本校一覽表、職員生徒調査表等は特に御持歸りあり御機嫌麗しく還啓あらせらる

▲物産陳列場臺臨

第三中學校より直らに物産陳列場に御成り陳列の物産に就き巨細なる御巡覽あり別項の如くうれ〳〵御買上げありたるが人口右方工業講習所出品物に關し武田知事は木地細工は先年福嶋、靜岡地方より傳習し今日斯る成績を擧げ得るに至れりと言上したるに再び後方へ御戻りあらばされ尙精しく臺覽あらせらる斯く漆器木地細工等には最も御注目あらせられしが藁細工の嬰兒籠は特に御目に止られ中に人形を容れあるをうれ共にて此價格なるやと御下問あり人形は小原事務官令愛の所有にて別の者なりと奉答し人形は献上致す旨言上したるに御氣嫌殊の外に麗はしく御胸をかゝへて御哄笑あらせ玉ふ尙ほ五十余種の馬鈴薯を陳列しありたるに極めて近く陳列棚に進ませられ御買上あるべき旨御沙汰ありたるより武田知事は直に全部献上申すべき旨言上したるに殿下には畏さくも否とよ縣下の馬鈴薯の産地五六ヶ村より各一俵づゝ差出すべしと難有き御言葉ありしに傳へ聞きしもの孰れも感泣せり△又た木地及藁細工の玩具は皇孫殿下御土産の御心にや三組づゝ御買上召されたる御仁慈の程申も畏さし殿下は場内陳列の物産に就ては最も御注目遊ばされ約五十分に渉りて種々御觀察御下問ありたるはいかに地方の産業に御心を注ぎ給ふかを拜察するに餘りあり斯て十時四十分國道御道筋を師範學校に向はせらる

▲師範學校御成り

中學校より御順路盛大なる奉迎者の間を進まれて師範學校に御着あらせられしは正に十一時。柿山校長は玄關にて奉迎申上げ直に御先導便殿(校長室)に入らせらる此の時殿下には校長より奉呈しまつれる職員名簿。入學志願者類別。學校一覽表。生徒成績品陳列目錄を受けさせられ次で柿山校長及勝又。木梨。石坂の三教授に拜謁を賜ひたる後御寫眞御下賜あり夫より順次左の五教室に於ける實地教授を御覽あらせらる

△博　物　(本科第一部第三年乙級)　木　梨　教　諭
△圖　書　(仝　甲級)　足　立　教　諭
△教　育　(仝　第四年乙級)　勝　又　教　諭
△裁　縫　(第一種講習科第一年)　荒　井　助　授　心　得
△數　學　(本　科　第　二　部)　石　坂　教　諭

實地授業御覽の折には裁縫教授に最も御注意御覽遊ばされ夫より階上講堂に陳列したる生徒其他の成績品を御覽あらせられたる際は多數の陳列品に一々御目をかけられ殊に下北郡川内尋常高等小學校御慶事紀念植林寫眞。北

郡飯詰農業補習學校藁細工塲寫眞。附屬小學校尋常科生徒の豆細工及粘土細工品等最も御熱心に御覽あらせられ就中是も生徒の成績品なる蔓細工石輪入(三箇)は格別御氣に入らせられたりと見え三個とも御買上の旨仰せ出されたり此の石輪入蔓細工は

附屬小學校高等科一年　坂田儀助　　仝二年　山本定四郎　　仝二年　横山英三郎

といふ三生徒の成績品にて柿山校長は殿下の仰せに對しまつりて献上致すべき旨知事を經て奉答したりといふ斯くて殿下には十一時十五分成績品の御覽を了らせられて直ちに第三高等女學校に向はせらる因に柿山校長は『拜察するに御望みの蔓細工石輪入は玩具にも宜しいので或は皇孫殿下御三方の御玩具にもと思召されたのでありませう恰度三個あつて仕合でした』云々因に川内村の御慶事紀念植林の事に就て御下問ありたることは前記の如くなるが當時知事は昨日(二十五日)大湊へ行啓の御途中御召艦より能く御展望し得らるゝ處にある旨を言上したるに御微笑を洩らさせアゝうかと仰せられたる由

▲高等女學校御成り

殿下には十一時二十三分師範學校御出門盛大なる奉迎者の間を第三高等女學校に御成りあらせらる田口校長は玄關の奉迎より直ちに御先導申上げて便殿(校長室)に入らせられ御少憩の後御寫眞を賜はり夫より便殿を御出ましの際田口校長に拜謁を賜ひ圖書(教諭佐々木ぎん子)。歴史(教諭繰木みさ子)。理科(教諭春日誠一)の實地授業を御覽あらせられたるが圖書教授御覽の際は武田知事に屢々御下問あり最も御熱心に御覽あらせられ夫より實地授業御覽後階上講堂に陳列しある本校及第二高等女學校並に八戸女子實業補習學校生徒の成績品御覽あらせらる生徒成績品の如き各校とも大同少異にて殿下東北行啓以來幾多の同種類のものゝ御覽を繰返へさせらるゝにも拘はらませず一樣の大御心を以て熱心に御目にかけられ本校にても左の織物十反は御氣に召されて御買上の御沙汰を拜しぬ生徒の光榮誠に大なりと云ふべし

八戸女子實業補習學校生徒成績品　△都織手巾　苫米地つね△保多織　淺香よう△瓦斯糸織　坂本とみ、浪打きくよ△木綿織　久慈ちよ△双子織　栗谷川みね△擬せる地　坂本とみ△太絲織　吉田はる、栗谷川ちよ、中野きくえ△綾絹　接待よし、清川もよ、仝きく△瓦斯絲織　接待よし、清川よし

斯くて殿下には成績品御覽の上一先づ御便殿に歸へらせられ少時御休憩の後ち十一時四十八分御旅館に還啓あらせらる御道筋に於ける一般の奉送迎者兩側を拖ひ非常の盛況なりき

▲蓮心寺御成り

當市蓮心寺は既報の如く桂東宮主事一昨日下檢分の結果愈よ行啓あらせらるゝことなり昨日正午高等女學校よりの御歸途仝寺に臺臨あらせらる其の光景を拜記せんに臺臨のさまは午前八時に確定せられたる由なるも豫ねて臺臨あらせらるゝも知れずと拜承せるより仝寺にては一昨夜寺僧及惣代世話方等は手を揃へて準備を爲し寺内及庭内の柵其他は総べて紅白の幕を張り玄關入口より行在所に至る廊下は殘らず白布を敷き詰め行在所には牡丹丸に淺黄隣室二ヶ所には仝紫の幕を張り隣室に椅子一脚とテーブル一脚外に小形テーブルを置き何れも白布を掛け他一室は單に絨氈を敷きたるまゝにて床の間には當時行在所に用ひたる文鵬畫家の仝寺庭内の老松を寫生せるに然江明と云へる人の仝松の由來を記したる三幅對の軸物を掲け置物は古銅の鴨大花瓶一對を備へ玉座は當時のまゝにて室の中央に据へあり又た明治九年及ひ仝十四年の行在所の御標は隣室行在所入口の上に掲けあり而して風呂塲兩便所とも皆當時の儘保存し置きたるものなれば少しも變じたる個所なかりし當日殿下の臺臨に就ては穴水蓮

心寺兼務住職門前に御出迎申上げ門の兩側には藤井蓮心寺住職代理以下役僧悉代世話方仝寺の家族及蓮心寺家族等整列し御出迎ひを申上げ殿下の御車境内に入らせらるゝや住職は行在所の隣室廊下迄て御案内申上げ拜伏して下りたるが殿下には直に行在所に進み御手に張幕を上げ玉座及床の間天井等室内總べてに御目を通され侍從の案内に風呂場の方まて總べて御覽あらせられたり御歸途には住職は門前まて他は玄關入口側に整列して送迎奉りたり尚ほ殿下の門内に入らせらるや奉迎者に御會釋あらせられ奉迎者の中に仝寺の召使の老婆も居りたるに御會釋あらせられたるやう拜せられ奉迎者一同感泣せりと

▲海産魚族御覽

拜承する所に依れば皇太子殿下には昨日午前市内御巡啓の後ち一先づ御還啓遊ばされ御晝餐を召させられて後ち御旅館庭園内に。タンクを設け

「たひ。かながしら。すゞき。ゑひ。小ざめ。かれい。あぶらめ。しまだひ。ほや付あはび。ばうぼう

等の鹹水産魚族の放流せられあるを御覽せられて二十余尾の鯛の群集せるに御目止めあらせ玉ひて見事なりとの御言葉あり又た艙の二尺余ばかりなるが約一坪位のタンク内に目由自在に而かも勢ひよく喰喝し居れるを御認めなされて『斯る狹き容器内にありながらいしくも活潑に泳ぐ魚かな』との御言葉を賜はり尚ほばうぼうを御覽せられては『泳ぎ方の面白い魚ぢや』と仰せられいと御氣嫌麗はしく御喜びあらせられ玉ひしに御說明申上げし武田知事は殊の外の面目を施し御側を引下りしとなん

▲第五聯隊御成り

殿下は御晝餐後別項の人々に拜謁を賜り午後一時半歩兵第五聯隊へ駕を枉げさせられ玉ふ中學校前を米町に博勞町。堤町を經て松原營所通りに至る兩側の御道筋は學生其他の奉迎者午前の如く沿道に整列し鹵簿蕭々として御通輦あらせられしが陸軍官舍通には筒井村愛國婦人會員。將校婦人會。赤十字社員を始め學校生其他一般奉迎者挑も恭しく鶴駕を迎へ營門外には野嶋聯隊長馬上にて御出迎申上げ將校士卒の全部は營庭西方に整列して殿下御着と共に君が代の喇叭を奏し捧銃の最敬禮をさゝげたるが殿下は直ちに將校集會所内の便殿に入らせられ御少憩の後ち上長官一人つゝに拜謁を賜ひ大尉以下には庭前にて謁を賜りたりられより野嶋聯隊長より一般の狀況を言上渡邊師團長等に絶えず種々御下問あり次に營庭に成せられ閲兵を爲させ玉ひ續て第七中隊の教練を臺覽ありしが教練は鑑倉大尉指揮し横隊行進中隊縱隊の編製横隊に排開御座所に對し方向變換突擊等を御覽右畢て第三第四中隊の兵舍に臺臨後一先づ便殿に御歸り更に庭園に松の御手植あり園内を暫らく御逍遙御機嫌いと麗はしく拜せられたるが殿下には特に聯隊に御寫眞將校集會所に銀盃一組金百圓聯隊長軍服地を賜り尚ほ兵士の手に依て製作せられし御屏風一雙(黑溝臺と奉天戰役の壽)蔓細工の御帽子掛、桐製の丸火鉢献上の儀御嘉納あり製作者の人名等に就て御下問ありたる荷過りをも兵士に調達せしむべき旨の難有臺詞あり三時十分還啓仰出さる奉送の儀以前の如く鹵簿は聯隊表門より營所道を合浦公園に成らせらる

▲合浦公園御成り

殿下には田畝万頃の間歩兵第五聯隊より練兵場に通ずる御道筋を進ませられて合浦公園地に御成あらせらる其の御途中練兵場御通路の東側及國道に傍ひたる地点に於て市内各寺仝科第五年以上の徒しにかゝる聯合体操遊戯を御車を徐行せしめて車上より御覽あらせられ夫より公園地に御着あらせらる公園地にては助役、市參事會員、市會議員等正門外西側に整列して奉迎申上げ參らせたるが殿下には不老亭前にて御降車直に市長の御先導にて馬匹陳

列の場處に御出遊ばされ第一に青森縣產馬聯合會及び七戸町濱中幾次郎氏より献上の左記馬匹二頭をやゝ暫く歩を止めさせられて御覽あり種々武田知事に御下問もあらせられし模樣に拜せり

▲三保野號　**アングロアラブ**種栗毛二才牡星二白四尺七寸五分（聯合會献上）

▲順風號　**アラブ**種栗毛二才牡星二白四尺五寸五分（濱中氏献上）

献上馬匹の内濱中氏の順風號は去明治十四年陛下東北御巡幸仝氏の邸宅は行在所に召れたる當時先代幾次郎の献上したる名馬黑染號の血統を享け居るものゝ由にて氏は先代の古き思ひ出もあり旁々獻上を願出で傳献差許されたるものなりといふ獻上馬御臺覽より引續き歩を進められ一通り二才牡。子付牝馬。種牡馬等四十九頭を御通覽あり夫より陳列場前にて陳列馬匹の内數頭たけ特に御前に牽出さしめて御覽あり後ち招魂堂東方に設けられたる御休所に入らせられて網引の催しを御臺覽あらせらる四十餘名の白半纏を被たる漁夫の掛聲勇ましく程よき所まで網を曳き上げたる折から殿下御出さしあらせられたるおとゝて間もなく大鯛、小鯛、鱸、小蝶など群魚潑溂なる網は岸邊に曳き揚げられたる殿下には漁夫どもが大きなる水槽の中に**バケツ**を以つて魚を移し居る所にッカ〳〵と歩を進めさせられ尾鰭振る魚の水の跳ねかゝるを厭はせられず御附の人々と共に御談笑いと興じさせて御覽あらせられたり斯くて二十分間許網曳御覽ありて御引返へしの道すがら劍舞御覽あり再び馬匹陳列所西北方の小高き所にて園内四方を御眺望ありて青森市及東郡の高齡者七十餘名に拜謁を賜ひ四時三十分頃公園地御出立ちあらせられたるが尚此日御豫定通り松樹の御手植もあらせられたり

▲公會堂御立寄り

公園地御出駕御歸館の途國道筋を高等小學校前より車をまげさせられ殿下の御慶事紀念として建設せられたる公會堂に御立寄遊はされ五時頃御歸館

▲提灯行列の光景

皇太子殿下の御慰みに供する爲め豫定の順序にて此日午后五時頃より市民無慮一万五千は市の東方榮町に於て行列を整て秩序整然として樂隊を先頭に堤川橋を渡り而して學校生徒は途中奉迎歌を歌ひ或は他の團体と共に萬歳を唱へなどして進行し又た各團体毎に町名又は校名等を附せる高張を捧持せしが堤町を經て博勞町を眞一文字に米町善知鳥神社前より左折し先頭隊の御旅館前に達するも後續は尚ほ米町二丁目上田商店前を進行し居り火龍蜿蜒首尾約七丁余無數の酸漿提灯はさしも空に輝く星光と共に金鱗今宵の光榮に感じ天地に歡喜して爲に躍動するよと思はれたりやがて午后七時半頃に至るや煙火冲天先頭に在りし芹川市長の發聲にて殿下の萬歳を三唱したるが聲は潮の如く團体より團体へと傳へられ行き天地をも震駭せんばかりなりき夫より國道筋を通り停車場に至り安方町より一隊は濱町を一隊は大町を通り津輕伯の旅館なる濱町伊東善五郎方前に於て又々萬歳を三唱せり

▲令旨を傳へらる

廿日午前七時縣内の功勞者十八名を皇太子殿下御旅館に召させられ拜謁所に於て武田知事川村内務書記官列席の上一同に對し村木太夫より左の優渥なる殿下の令旨を傳へられたり

今回

皇太子殿下當縣へ行啓に際し縣知事より殖產興業敎育慈善其他公共事業に盡瘁せる諸君の勃績を上申せられたるに付逐一言上せし處

皇太子殿下御滿足に被
思食此旨を傳達する爲め本日諸君を御呼出し致した次第であります諸君には尙ほ將來倍々勉勵各々事業發達を
圖り
殿下の
思食に副ひ奉る樣盡力あらんこと本縣の切に希望するのであります
次に武田知事より殿下には諸氏の功勞を喜みし特別の御沙汰を蒙らしめられたるは無上の光榮なり尙ほ一層奮勵
して邦家の爲めに盡瘁し殿下の御盛旨に悖かざらんことを望むとの訓示及川村書記官の懇篤なる挨拶あり終りて
別室に於て一同へ御菓子を賜はりたるが工藤徹郎。山田浩藤二氏は事故不參せりと

▲青森市御出發

青森市を初め地方の熱誠を以て迎へ奉れる東宮殿下には愈々當地に於ける御巡啓を終はらせ廿八日を以て御發車
七戸に向はせ給へり殿下の青森市に御扨濕を給ひてより所謂殿下日和とも申すべき好天氣にて再昨日の大湊行啓
次ては昨日の青森市內御巡啓。さては昨日の御發車の際には滿天濟み渡りて好晴言はん方なし殿下には昨日午前
七時五十分御旅館御出門北へ右へ第三中學校。裁判所前を左へ新町小學校前を過り安方停車場へ向はせられしが
奉送者は奉迎の際と同じく步兵第五聯隊。各縣市立學校。其他各團体。一般人民は沿道の兩側に整列し**プラツト**
ホームには津輕伯爵。玉利大湊要塞司令官。野嶋聯隊長以下重なる將校。市內各官衙高等官。貴衆兩院議員。芹
川市長。縣會議員其他赤十字特別社員。愛國婦人會員等多數奉送したりしが殿下御出門近き頃より轟然たる花火
は中天に響きて一般の奉送に注意を促かし斯くて殿下には鹵簿肅々奉送者の敬禮に對して畏くも一々擧手の御會
釋を賜ひしよう拜せらる午前八時と云ふに御車は徐々動き初めぬ。奉送者はいつれも恐れ多きまでなから御德高
き殿下を送り奉るまと此の上もなく惜み奉りて肅然と水を打たらん如くさては歸くむもの多きを見受けたり

▲青森御巡啓餘聞

○英語科の成績　縣立第三中學校に於ては第五學年生の英語教授御覽の時に知事より此の學校の生徒は學生の最
苦しむ學科たる英語をば熱心に勉强し其の成績の見るへきものある旨言上し奉りたるに殿下には大に御喜ひの御
樣子にて當時の課程たる會話を御熱心に御聞取り遊されたり
○柔道の御覽　尙ほ同校にては豫定の學科を御覽濟み御座所に御還りの途中知事より當校の學生は柔道にも達し
居るまとを言上し幸に御覽を賜はらは此の上なき光榮なる旨願出てたるに殿下には御快く御許しに相成り直ちに
雨中蘇操場に成らせられ柔道の形と乱取とを御覽あらせられ遂に御休憩をも遊ばせられず御徒步にて物產陳列場
に行啓あらせられたり
○實業警醒の思召　物產陳列場にては約三十分間御覽を賜ふへき豫定なりしに殿下には產業奬勵に御心を寄せさ
せらるゝの厚き一時間餘の長き間一品一物まとに御熱心に御目を注かせられ御手つから數十點の品を御選ひの上
之を御買上となるへき御沙汰ありたれは元來陳列品の餘り多からざる物產陳列場の事にて其の目ぼしきものは悉
く御買上に相成りたるも同しまとなり是は定めて縣廳に御成りの節武田知事より本縣產業の微々として振はさる
まとを言上せるにより殿下には特に本縣實業者を警醒せしめられんとの深き御心より出しものならんと知事初め
一同感泣し居れりと云へり

○行在所の御感慨　第三高等女學校よりの御歸途先年　聖上東北行幸の際行在所に充てさせられたりし市内蓮心寺に御立寄あらせらるゝ旨仰出されたるに依り急に御道筋を變更して同寺に御案内申上げ知事より同寺は明治九年十四年の兩度行在所に充てさせられ九年は六月十四日御着二日間御駐蹕同十六日に御發輦遊はされ十四年は八月廿七日御着二日間御駐蹕同二十九日御發輦遊はされたるおとを言上し奉り應て當時の御座所御寢室其の他御用に充てられたりし各室殘る隈なく一々御案内し奉りたるに長おくも御便所にまで玉歩を枉けさせられ御湯殿御巡覽の際には極めて古ひたる竹輪の古桶の据へあるを知事より是おそ陛下兩度の行幸の折に御使用あらせられたる御風呂桶なりと言上し奉りたるに殿下には御容を改めさせられ御熟覽あらせられ又御立際に庫の裏御通りの節には知事に向はせられ此の部屋は當時御供の人々の部屋なりしかとの御沙汰あり多大の御感慨を催させられたりしが如く拜し奉り暫く御低徊遊はせられたる御有樣なりし知事に於ては深く御高德に感激し恐懼措くおと能はざりしと云へり

○白鳥傳献御採用　上北郡小笠原善次郎より傳献願出てたる白鳥を御旅館御庭前に持出し御覽に入れ奉りたるに殿下には頗る御喜ひにて御採納あらせられたる赴き拜承す

奥羽種馬牧場行啓

其ノ一

七戸町にては舊藩主南部信方子去る二十日來着し小鳥郡長高橋町長外各當事者も奉迎準備に熱誠を注ぎ沿道各村落亦道路を清めて心より奉迎せるが沼崎驛より同町まで三里同町より牧場まで一里半各村とも農民茅屋の簷下に蓆を敷きて男女端座整列し中には感涙を催ふし合掌して奉拜したるなど殿下にも定めし御滿足なりし事と拜察せしが七戸町にては國旗球燈其他の準備を整へ同夜各自店前を飾りて相應の人出あり濱中家にては陛下臨幸の際の行在所に紫の幔幕を繞らして飾り高札を建てたるに殿下には其前を御通輦御感深かりつやに拜せり

二十七日午前十一時四十分牧場表門に御着此處にて牧場御差立ての二頭立て御馬車に御召替あらせられ此處にて御出迎え申上たる安井場長(騎馬)の御先導にて牧場事務所まで構内一里半の行程を靜々と駕を進めさせられ間もなく場員一同の奉迎に御會釋を賜ひつゝ御旅館に入らせらる御旅館にては御晝食後

從三位子爵南部信方△種馬牧場長安井淨之助△騎兵少佐櫻井軍太夫騎兵大尉權藤五七郎△歩兵大尉佐々木本典△陸軍二等主計牧卯兵衛△技師田邊幸太郎△勳六等工藤轍郎

の八名に拜謁を仰せ付けられ次て安井場長より捧呈しまつれる諸種の事業報告書を受けさせられたる後午后二時半御旅館御出門場内御巡覽遊はさる場内御巡覽は馬車にて先づ第二種馬厩前まで御出ましあらせられ此處より一旦馬車を降り厩舍を御通覽あらせられたる後ち覆馬々見所に成らせられて優等馬匹二十六頭を順次御前に牽き出さしめて御覽あらせらる

二十六頭の御覽には殆んと一時間以上を御費やしあらせられ藤波馬政局次長に對し種々なる御下問あり夫より厩馬場に於てアラデュ以下七頭の乘馬運動御覽せらる肥馬駿足就れも潑剌の概あり然して之れか指揮者は馬乘の達人神取技手(騎特務)にして先頭には久保田技手打さ跨つたり一隊七頭殿下の御前に整列して一禮し進めの一令に輪乘。卷乘。順々卷さては早足手前換之等秩序整然乘廻はる有樣如何にも見事にして殿下にもいとゞ御感賞の御言葉あらせられたりといふ乘馬運動の御覽終りて引續き牧場產二才優等牡馬五頭

▲第一ッウーンバ種(栗毛)△第五ジンギシカン(アングロアラブ種栗毛)△第二ジンギスカン(アングロアラブ星一白栗毛)△第四カズラン(アングロアラブ種鹿毛)△第一テンターフェルト(星栗毛)

を牽出さしめ御臺覽あらせらる石の五頭は御臺覽御豫定外のものなりしも馬匹御熱心ましませる殿下にはいと御熱心に御臺覽あり中にも第二ジンギスカン及第一テンターフェルトの二頭に御目留められてツカ〳〵と御馬見所の手すりの所まで御出ましあらせられ數分間牽き廻はさしめて此の二頭忘れずに居る注意して飼ひ置けるの御言葉あらせられたりといふ藤波次長も殿下の右二頭に御目留められたるには今更ならねど殿下の御目高きに感服せられたりとの事なり斯くて馬見所にあらせらゝること二時間餘にて今所御立ち再び馬車に召されて御進みになり第一牝馬厩第二追込厩等を御覽あらせられて後一丘高地三浦山に御徒歩にて御登臨あらせられ放牧の狀況並に一眸開闊の牧場全景を御覽あらせられ風景の佳なるにはいと御褒めあらせられたるやに洩れ承はりぬ三浦山にあらせらゝること十數分にして全所御立ち馬車にて牧場事務所なる御休憩所に入らせられ茲にて南部有名なる駒舞を御臺覽あらせれいと興じさせて種々武田知事に由來など御下問あらせられ五時過き御旅館に入らせられたり此の日天氣晴朗微風颯々虫聲天琴の如く萬目仙境の如し殿下には行啓以來雜踏の間のみ御通りあらせられたる御身の爰にてはいと閑靜に思召されたるならんと推察申上たり

其ノ二

東宮殿下は御旅館に成らせられてより御晝餐後藤波馬政次長は拜謁を願ひ約一時間も御前に於て馬匹改良の急務なること言上せられたりられより拜謁を仰せ付けられしは安井種馬牧場長。新山馬政官。廣澤馬政官。田近馬政局技師。南部子爵。櫻田騎兵中佐等なり

覆馬場にて牧場の優等馬匹御覽あらせらるゝや願み給ひて殿下は茲の馬を召ては他の馬は召されないヨと御仰ありたり約一時半に亘る長時の間馬匹を綿密に御覽せられ就中數頭の馬は前後左右に立たせ給ひ其良否を御鑑定遊さる御眼力に至ては實に恐入つたものにて馬政次長も舌を卷き居たり聞くところによれば馬政局より左の二才洋種牡馬一頭献上せりと

第一テンターアイルド、アングロアラブ流星栗比四十年生四尺六寸六分、父純血ヲンターフイルド、母アングロアラブ第一ジリーワ

夫より各厩舍に就ては其飼料の種類及び其日量まで安井牧場長に御質問あらせ病氣の多寡種類とも御尋ねあり場長より食々外傷は有之も内科病は至て稀れに候旨言上せしに殿下には馬も可成自然に近く充分活潑なる運動をなさしめ飼育せば無病なる可しと御首肯あらせられたり

二才牡馬の木柵内運動を御覽あらせられ其先導馬の自然に一定せるなど不思儀に思召し他の馬を壓迫せずやとの仰せに牧場長は別に去る事は候はじ只だ先導を侵すものを退排するのみ荒き壓迫は不致と言上せり夫れより特に厩歩の運動を御所望あり夫れより繋せられ二才洋種牝の飼付けを御覽せられ多數の馬匹の頭を列ね嗜食する杯をいと興ありけに御見され給ひ山上に御上りには例の如く御健脚にて先導せる牧場長を繋はせられ『肥て居るから昇るには苦ろうだ』藤波子爵に向はせられ『お前は此山に上つた事はありしか』との御問ひあり子爵は『否とよ牧場長上りました昨日も已に上りました』と言上せしに『馬にて上つらん馬の足跡ありとの仰に子爵は『何度も』が馬で上りました』と申されければ牧場長は『決して左樣の事は候はじ此邊は放牧場に候へば馬蹄のあとは澤山あります』と申され殿下は御笑興じ給へり

山上にては山の名など御尋ねあり牧場の境界を指願し遊ばされたり

257
776

事務所御座所に入らせられてより牧場長を召され燕麥の良否牧草の事馬齒標本に付御下問などあり後ち駒踊りを見給へり是亦御滿足の躰に拜し奉れり

御旅館に入らせられて後ち牧場長より七戸名物として今度改良命名せる駒饅頭牧場繪葉書を献上し又藤波子爵の手を經て一首の歌を奉れりと云ふ

皇太子殿下の奥羽種馬牧場に行啓あらせられたるをかしおみて

御車を迎へまつりてわれのみか
うれしがるらん牧の若駒

特に場長を御旅館に召され侍從長を以て御滿足の旨吳々も御申傳へられし由拜聞す

明治四十一年十一月廿三日印刷
仝　年仝　月廿五日發行

定價　拾五錢

編輯兼發行人　青森縣弘前市親方町十二番戸　近松豊助

印刷人　青森縣弘前市萱町廿八番戸　松山勇太郎

印刷所　青森縣弘前市下白銀町三番戸　北辰社印刷部

發行所　株式會社北辰社

終